自閉スペクトラム症幼児の初期語彙領域の構成と文の複雑さ

小山　正
（神戸学院大学人文学部）

KEY WORDS: 初期語彙構成　文の複雑さ　自閉スペクトラム症

[本研究の目的]　自閉スペクトラム症（Autism Spectrum Disorders: ASD）の子どもの統語（シンタクス）発達の支援を考える際に，語彙内容は注目される。定型発達児の初期の語彙獲得過程においては，動物，食物，乗り物などの領域（domain）に関する新たな語の学習が進み，それぞれの領域を精緻化し，再体制化して意味的領域を構成していくといわれている（Clark, 2017)。また，Clark（2017）は，表出語彙数 100 語から 200 語前後には，過大拡張がまだかなり見られることを指摘している。その後，言語発達の様相は変化し，シンタクスの発達がみられ始める。Harris (2013) は, The MacArthur Communicative Development Inventory (CDI; Fenson et al., 1994) による資料から定型発達児において，<文の複雑さ>が 24 か月以降に急速に発達すること（スピードアップ）に注目している（Harris, 2013)。Ninio （2011）は，初期のシンタクスの発達において，core となる動詞に注目し，動詞の広がりにも名詞同様の fast mapping の現象があることを指摘している。表出語彙数との関連では，小椋・綿巻（2004，2016）の定型発達児の資料では，生後 24 か月においては，男児，26～536 語，女児，55～574 語の範囲にある。

ASD 児に関しては，定型発達の子どもに比較して，速度が遅いが，シンタクス構造の獲得順序は変わらないといわれているが (Tager-Flusberg, 2009), ASD 幼児の初期の語彙の構成はシンタクスの出現とどのような関係があるのだろうか。本研究では，CDI を用いてシンタクス出現期の ASD 幼児の語彙領域の構成を明らかにし，<文の複雑さ>との関連について検討することを目的とする。

[方法]　(1) 研究協力者: 児童発達支援センターで療育を受けている，および大学で発達相談を行っている生活月齢 40 か月から 75 か月の ASD の子ども 28 例（女児 7 例)である。全例，3 歳時に児童精神科医により ASD の診断を受けている。協力にあたっては，保護者に研究方法・内容，研究結果の発表に関して説明し，同意を得た。(2) 方法: 養育者に「日本語 CDI・語と文法」（小椋・綿巻，2004）を記入してもらった。(3) 分析の視点: 各事例の総表出語彙数によって，CDI における表出語彙下位領域語数から語彙構成を検討し，日本版 CDI<文の複雑さ>との関連を分析した。

[結果] ⑴<総表出語彙数>と<文の複雑さ>: Fig1 に各事例の CDI における表出語彙総合計得点である<総表出語彙数>と<文の複雑さ>得点との関係を示した。総表出語彙数において 50 語を越えた事例において<文の複雑さ>に得点が見られ，200 語あたりの事例までは緩慢に<文の複雑さ>の得点は増加すると考えられた。さらに，300 語を越え，400 語を越える事例においては，語数の増加とともに<文の複雑さ>の得点の増加が見られた。⑵<文の複雑さ>増加期の語彙領域の発達:　次に Fig1 の結果から<文の複雑さ>において未得点の 11 語から 50 語未満群, <文の複雑さ>が見られ始めた 50 語以上 250 語未満群，250 語以上 400 語未満群，400 語以上の 4 群に分けて，各語彙領域の平均語彙数を Fig2 に示した。

語彙は, 50 語未満の群に見られていた語彙領域において，50 語以上 250 語未満群，250 語以上 400 未満群では引き続き増加し，新たに増加する領域は少ないなかで、250 語以上 400 語未満群では，語数が増加した領域として<動作語>が注目される。そして，400 語以上群において最も高くなっていた。

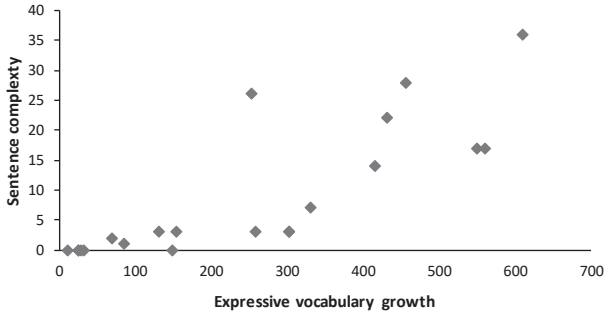

Fig.1 総表出語数と文の複雑さ

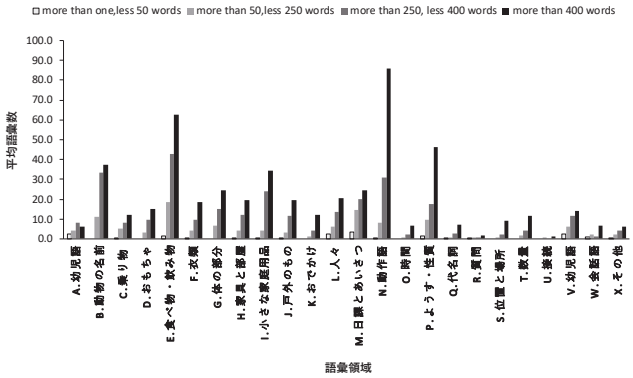

Fig.2 群別に見た語彙領域の構成

[考察]　本研究では，ASD 幼児の初期のシンタクスの発達を CDI の<文の複雑さ>と表出語彙総数から見た語彙構築，語彙領域の広がりとの関連から検討した。日本語版 CDI の<文の複雑さ>においては，助詞，助動詞，補助的助詞の付加，統語成分の付加等，語形態，統語の発達を見ている (小椋・綿巻，2004)。本研究で対象とした ASD 幼児では，50 語を越えている事例から<文の複雑さ>が見られ始め，200 語あたりまでは，ゆっくりと<文の複雑さ>が増していくことが明らかになった。<文の複雑さ>にスピードアップがかかると考えられるのは，総表出語彙数が 300 語～400 語あたりであった。そして, 語彙の構築という観点からは，動作語の語彙領域における語数の増加がこの時期に際立っており，動作語領域の新たな語の学習と，その精緻化が<文の複雑さ>と関連しているのではないかと考えられた。そこには，Ninio (2011) のいう動詞の fast mapping も考えられる。語彙領域の発達という観点からは，ASD の子どもの初期のシンタクスの発達プロセスには「非直線的」な発達が示唆され，その背景には，一定の語彙領域での表出語彙数の増加が基盤にあると考えられた。

文献

Ninio, A. (2011). Syntactic development,its input and output. Oxford: Oxford University Press.

(KOYAMA Tadashi)